

PRO-LIFE

中絶に反対する運動

1999年4月 No.102

胎児を守る運動

妊娠するのは女性だけ

これは、女性について、女性のために書かれた文章です。そして何より、男性も女性もその行動については等しく責任を負うもの、結局は、女性の方が失うものが大きいという事実を女性に認識してもらうための文章です。なぜなら、妊娠するのは女性だけだからです。唯一の例外であるコンドームを除いては、すべてのピルや避妊器具は女性が服用し、女性に注入し、あるいは挿入するのです。そして、もし、コンドームが失敗すれば、妊娠するのは女性なのです。中絶手術はすべて女性に行われるもので、男性には決して行われません。感情的・精神的な影響は双方に現れますが、セックスの結果、より大きい障害に遭うのは女性なのです。ですから、男性がどこまで性行為を進めるかは女性が鍵を握っているかと率直に認めましょう。女性がノーと言っているのに彼が続ければ、それは彼女を虐待し、レイプしていることになるからです。

多くの男性が処女と結婚したいと考えているにも関わらず、一部の男性が女性の「処女性」を無視し

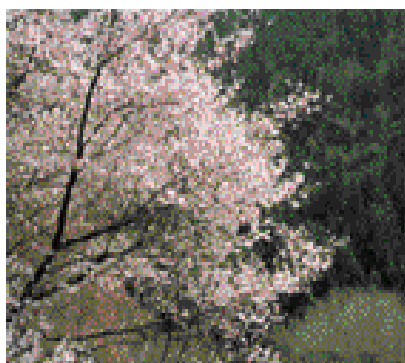
た行動をするのはなぜなのでしょう。ある女性が言うように、男は野蛮なんでしょうか？とんでもありません。男は男、女は女。神様は両性を等しく、しかし異なってお造りになりました。ですから、その違いを知ることが大切なことです。男性は、より強い性への欲求を持ち、女性は愛への欲求を持っています。「男らしく」なるためには彼女とセックスしなければならぬとする社会において、男性はセックスを求め、女性は愛を求めます。その結果、彼女は愛を得るためにセックスを与え、彼はセックスを得るために愛を与え、互いに間違った使い方をしてしまうのです。何年か前に「アイ・アム・ア・ウーマン」という歌がはやったのを覚えていてでしょうか？その中に、私達女性が心に留めるべきこんな一節があります。「私は、望むことなら何でも出来る。私は強い。なぜって、私は女だから！」何でもできる、というわけにはいかないでしょ？が、デートの時、家庭において、また社会で、女性が道徳的風格を備えることが出来ると私は確信

しています。女性リーダーとして、他とは違った行動、服装、話しかた、生き方をすべての世代の女性が求める必要があるのです。それにはまず、相手の男性を尊敬しましょう。そして、自分に対する尊敬を相手にも要求しましょう。服装にも気をつけること。質素で清潔で身だしなみよく、常識的な服装をすることです。肌を露出すればするほど、男性は刺激されます。そして結婚前にすべてを見せたいしまえば、二人の間の未知の部分はなくなり、彼は魅力を感じなくなってしまう。相手をからかったり、挑発してもいけません。そんなやり方はフェアではないし、賢くありません。デートの前にあらかじめ境界線を決めておき、相手がそれを越さないようにしましょう。イエスという答えは二人がいて初めて出せるけれど、ノーという答えは一人でも出せるのだということを覚えておいて下さい。デートではアルコール（ビールを含む）は一切飲まず、彼にも飲ませないこと。アルコールは人を情熱的にし、良心を忘れさせます。相手

と話をしなさい。もしコンドームしかねるような状況になったら、はつきり相手にそう告げて、例えば散歩などの他のプランを提案しましょう。処女であることを大切になさい。そしてあなたがもし処女ではないのなら、セカンダリー・バージニティを実践しなさい。それも充分意味のあることです。

おしまいに、もう一度「アイ・アム・ア・ウーマン」の歌に戻って、あなたがた女性に言います。「あなたは強い。あなたは何でもできる。しかし、その強さを得るにはそれをまず望み、計画し、祈らなければなりません。私達の女性パワーを良いことに使いましょ！貞潔は伝染するもので、あなたが実行していれば彼も実行せざるを得ないので！

モリー・ケリー



誕生前と誕生後の人間の四つの相違点

胎児と生まれてきた人間の間に、もちろん違いがあります。その違いは何でしょうか。そして、その違いの中のどれが道徳的に重要でしょうか。七週から八週の子どもに関してこの問いを検証してみましよう。誕生前と誕生後の人間の間に、四つの大きな相違点があるように思われます。

(一) 大きさ

七週目の胎児は新生児よりも小さいのが普通です。新生児は一才児よりも小さく、一才児は五才児よりも小さいのが普通です。このことは道徳的に重要なことではありません。大きい人間が小さい人間よりも、もっと人間らしくもっと尊いということは決してないのです。小さい新生児であっても、より年長の子どもや大人と全く変わらず尊いのです。胎児はただ身体が小さいだけなのです。

(二) 発達レベル

赤ん坊は十代の子どもに比べると発達の程度は劣ります。しかし、人としても劣っているのでしょうか。小さいことと同様、少しか発達していないことは、人間の一生のうちで初期の段階にしていることを表しています。しかし、その赤ん坊は同じく人間なので、発達の段階が最初であっても最後であっても同じ人間なので

す。そうでなければ、その人間の発達とは言えないでしょう。七、八週の胎児は、もう少し後の胎児と比べると、発達の程度は小さいですが、そのときまでです。十分発達しているのです。八週目を過ぎるとそれ以上胚胞が形成されることはありません。つまり予定日を迎えた赤ん坊に見られるすべてのもの、たとえば、半分だけまぶたを閉じた顔や、もうすぐ握りそうな手や、最初の一蹴りをしようなどとはもうすでに備わっているのです。

(三) 環境

二人の人間がそれぞれ別の環境にいても、その二人の本質、尊厳、価値に関して何も変わるところはありません。胎児が母の胎内にいるということは、私たちの今いる環境とは違った環境にいるということなのです。しかし胎内にいても、生まれた後でも、同じく本物の人間、本物の子どもなのです。保育器に入っている子どもも普通の環境の下にいる子どもと同様に本物の子どもなのです。胎児は暖かく胎児を守ってくれる母親の胎内にいます。そこは、胎児がまだ小さくてか弱いうちは、いなくてはならない環境で、保護や栄養補給や成長に必要なところで、そして、胎児が外の世界で人生の荒

波に耐え抜くことができる人間に成長するために必要な環境なので、胎児と赤ん坊の違いは必要とするものの違いであって、本質や価値や尊厳に差があるということではないのです。

(四) 依存度

私たちは誰も皆、肉体的精神的にお互いに依存しあっています。中には、子どもや病人や障害者のように、他の人により多く依存している人たちもいます。例えば、(C)集中治療室)において依存度の大きい人も、比較的自立している人と同様に、人間なのです。人間の本質や尊厳や価値などと依存度とは道徳的には無関係だということを明確に理解するために、次のことを考えてください。

(A) 依存度は相対的なものです。それはまさに、多いか少ないかという程度の問題なのです。誰でもある程度は、肉体的精神的に他の人に依存しているのです。時によっては、たとえば道に迷った

り、重大な事故に遭ったり、失明したりすれば、私たちは普段よりも他人に頼ることになります。明らかに、そのような状態が私たちの人間性、価値および尊厳、生きる権利に影響を与えることはありません。(B)特に、あなたが他人に頼っ

ているとき、つまり普段以上に他人に依存しているときでも、現在のあなたが、過去や未来におけるあなたと同一の人間であることを覚えておくことが重要です。それは胎児も同じなのです。人生のこの段階にいる人間も、やがて生まれ、成長してだんだん依存しなくなる人間と同じ人間なのです。

(C) 今、あなたは健康で、比較的自立しているときでしょう。そのあなたがひどい事故に遭い、その結果身体が麻痺し、誰かに頼らなければならなくなるとします。あなたが生きていくためには、胎児と同じように、誰かに保護され食事の世話をしてもらわなければなりません。それでもあなたは、やはりあなたなのです。あなたには同じ尊厳と生きる権利があるのです。あなたが誰かから、「あなたには価値がない。あなたは頼りすぎている。」と言われたとします。あなたは憤慨するでしょう。もしあなたが邪魔な存在だと思われていて、それがあなたを殺す理由に使われたとしたら、ひどく不正な行為だとみなされるでしょう。

胎児は依存しすぎているという理由で、まさにこれと同じことが、中絶を擁護する人々に胎児について言われているのです。胎児は言われていることが聞こえない、理解できない、そしてそのこととはあまりはっきりとは言われていないという事実は、確かに道徳

的な重要さはありません。つまり、正常であるうとなかるうと(胎児であるうとマヒした人であるうと)、余計に手のかかる人間が人間でないとか、私たちと同じように扱われる価値がないとか考へることは、全くの偏見で事実無根なことです。それはちょうど、遠いところで、異なった文化や民族集団をなして暮らしている人々が、悪い意味で変わっているとか、人間らしくないとか、完全に死は大したことはないとか、あるいは知り合いの人の死よりは、ずっと問題にならないと言い切る偏見のようなものです。異なっている理由が、異なった文化に属しているからであれ、人に頼りすぎているからであれ、異なった人であれ、私たちと同じような、同じ生きる権利を持った人間なのです。胎児はただこの一例に過ぎないのです。尊厳や生きる権利に関して、そのような人間が他の人間と全く同様に扱われるのは当然のことです。ベッドで眠っている正常な子どもを殺すのはとても悪いことです。保育器に頼っている子どもを殺すことも同じく悪いことです。中絶は母の胎内という保育器にいる子どもを殺すことです。より多く依存している子どもは、より弱い子どもであり、世話や保護をより多く受ける必要があるのです。

流産と乳ガンは 関係ないの？

疫学者ジャネット・ダーリンは、国際ガン協会の発行する機関誌の十月号の中で、薬物誘導による中絶をした45歳未満の女性の乳ガンの発生率が50%も一般の女性に比べて高いことを発表した。先頃のグラマー・マガジン誌（95年3月号）の中で同女士は次の質問に以下のように答えている。

質問：誘導療法による中絶が乳ガン発生率の増加と関係あるのなら、流産しても同じ事が起こるのではないですか？

答：乳ガンの発生率はホルモンが強く関連していると思われる。妊娠期間中において、最初の三ヶ月間はホルモンの働きで未発達かつ「未分化」な乳腺細胞が形成されます。この発達が突如妨げられることによって、発達中の乳腺細胞が発ガン物質へと変化する可能性が高くなると考えられます。流産の場合は、このような乳腺の発達が始まらない、ホルモンのレベルがまだ低いような早期段階に起こることが多いのです。更に、流産した女性のほとんどがその後五年以内に再び妊娠・出産することが、前回未分化に終わったままの乳腺細胞を再び活性化させ、分化

たいていのイギリス女性が 中絶にもっと多くの制約を 望んでいる

中絶に対するイギリス国民の意識調査で、中絶が合法化されて30年経った今、中絶に新しい制約を加えるべきだと、男性も女性もほとんどの人たちが思っているという結果が出ました。

ギャラップ調査では、調査された人たちのうち、59%の女性と、男女の半数以上が、中絶可能な上限を現行の妊娠24週から10週に引き下げるように望んでいるという結果が出ました。68%の女性と57%の男性が、中絶は、「特別な事情」がある場合にのみ許されるべきだと思っています。いつでも中絶できることを望ん

を終了させることとなり、発ガン物質へ転化する期間が長期に及ばないことの原因になっています。しかし、これらのことはいまだに仮説に過ぎません。現段階では関連があることを発見したにとどまっています。何が原因でどういう結果になるのか、我々も更に研究を進めていく所存です。

でいる女性は、21%しかいません。49%の女性は、望まない妊娠をした母親は子どもを産み、その子を養子に出せばよいと言っています。昨年、イギリス国内で行なわれた17725件の中絶のうち、55件は23週か24週で実施され、92件がそれより以後に実施され、およそ15700件の中絶が、13週に満たないうちに行なわれているのです。

一方、ヨークの大主教、カーディナル・ベイシル・ヒューム師は、カトリック教徒であるトニー・ブレア首相に中絶を禁止するよう要求しました。中絶を合法化して30年になることを確認し、カーディナル・ヒューム師は公然とブレア氏に、「あなたは高潔で正直な方だから物事がはつきりと見えるでしょう。党内でリーダーシップを取り、中絶はまちがいであり、国家として自分たちが何らかの処置を講じなければならぬと、彼らを説得するのはあなたの仕事だと思っていますのだから」と言いました。

女性解放と中絶反対

女性の権利を強く信じる教育を受け、仕事を持った女性として、私は中絶に強く反対しています。このことは、決して矛盾することではありません。もし、私達人権と公民権の重要性を強く信じるならば、それらの権利の恩恵は等しく与えられなければなりません。私達は、誰がより多くの権利、特に生きる権利を持つのかを選ぶことはできません。

したがって、問題は母親の自分の体に対する権利のことになったのです。しかしそれも適切な問題ではないのです。というのは、私達の価値観ばかりでなく私達の伝統や法体系も、私達は他人の権利を冒さないかぎりにおいてのみ、自分の思い通りに自由にできる考え方に立脚しているからなのです。

自らを自由主義者で中絶選択権擁護派（つまりプロ・チョイス）と呼ぶ人々は、女性が自分の体に対して有している権利への関心が高いことにプライドを持っていきます。私はこのことに危惧の念をいだきます。というのは本当の自由主義者は、全ての人の権利、特に無力な者の権利に関心を持つ者であるはずだからです。

矛盾が多すぎます。妊娠している女性を殺害した人は二人の間を殺害した罪を問われることになりませんが、妊娠している女性は、赤ちゃんを合法的に殺すことができるのです。胎児は財産権や相続権はあっても、生存権はないのです。医師は妊娠18週にしかならない未熟児を救けようとしています。女性は妊娠のどの段階においても、中絶をすることができなのです。

胎児は生きものではないという古い考え方は、もはや何の意味もありません。非常に多くの医師や専門家が、命は受精の時から始まると結論を下しています。だから、声高に中絶賛成を叫んでいるグループは、命に関わる問題に触れようとはしません。

このような矛盾に注意を喚起する必要があります。私達の法体系の長所は、市民の権利を守ることでできる能力にあります。しかし今の法体系は、最も保護を必要としている者、つまり胎児の権利を守ることに効力を発揮していないのです。

私の小さな奇跡の子

二、三年前に、自分がどんな人間かと聞かれていたら、「私は独立独自行タイプの女性です。自分の人生を自分の思い通りに生きたいと思えます。私が経営する会社は好調で、私は素敵なスポーツカーに乗っています。」と答えていたでしょう。

私は夫と二人の素晴らしい子どもたちに恵まれ、素敵な教会の一員でもあったのですから、あなたから見て私はすべてを手に入れた女性の一人だと写ったことでしょう。

でもその後、私には自分の力ではどうすることもできない事が起こったのです。私の思う通りには人生はいかなくなりました。

妊娠三ヶ月目の検診を受けに医者のところに行ったときのことです。医者は、「少し困ったことがあります。赤ちゃんがずいぶん下の方にいます。おまげに検査の結果から、赤ちゃんの腎臓は両方とも炎症を起こしている通常の状態よりかなり腫れていることがわかりました。」と言いました。

「二、三週間安静にして、ベッドに横になってみましょう。うまくいくことを祈りましょう。おそらく予定日まで持たないでしょう。もし予定日まで持ちこたえても、腎不全の恐れがあります。その時は赤ちゃんは助からないかも知れません。」と医者が次々に言つのを聞いています。

うちに、私の目から涙が溢れてきました。その瞬間に、自分で何でもできるという自信は消え失せ、無力感がどっと押し寄せて来ました。私は怒りに身震いし、嘆き悲しみました。

医者と看護婦は私を慰め、落ち着きを取り戻させようとしてました。医者はきつと私の気持ちを和らげようと思つて次のように言つたのでしよう。「中絶するにはまだ遅すぎることはないですよ。」と優しく言いました。でも私は、「中絶ですって。赤ちゃんを殺すなんて、だめです。私にはそんな選択はできません。私は絶対そんなことはしたくありません。」と言いました。

それからの三週間はベッドで横になっていました。その後、一日に何時間か起き上がることを許されました。その後の検査の結果から、赤ん坊の腫れた腎臓はしだいに大きくなっていくのがわかりました。腎不全の可能性がありました。

私に何ができるのでしょうか。私には五人の従業員と40人の子どもたちがいる託児所があります。彼らは私を必要としています。でも私は「この子を出産する」という当初の決心を変えていませんでした。

次の何ヶ月かはとてもゆっくり過ぎていきました。私は一方で自分のことに気をつけながら、家庭も仕事

もできるだけ順調にいくようにしていました。自分自身の生活を自分で管理することは依然として私にとつては重要なことでしたが、それは日に日に難しくなっていきました。

妊娠八ヶ月にさしかかつてすぐ、私の可愛い坊やは帝王切開で生まれました。彼は生命に危険な状態だったので、緊急に市の大きな病院へ飛行機で運ばれ、そこで専門医が、腎臓から尿を排出させるために彼のお腹の片側を切開しました。

夫と義母はこの幼い奇跡の我が子の元へ駆けつけました。しかし、私は帝王切開の手術から回復するまで、五日間も地元の病院のベッドに横たわっていました。その間私は、我が子の命が危機に瀕しているのを知つて、心が痛み、打ち拉がれ、困惑した状態でした。我が子のそばにいてやりたくて居ても立ってもいられませんでした。

五日後、私は病院を退院して我が子のところへ行かせてもらえらるよう、医者を説得しました。病院に着いて、一目彼を見て、私はショックを受けました。彼の小さい身体からいくつもコードや管が出ていて、いろんなモニターや機械につながれていました。彼は痛みがひどいらしくモルヒネを投与されていて、それがよけいに彼を弱々しくさせているようにみえました。

彼のことで私の心は痛み、無力感が募りました。医者は彼を抱き上げ

ることさえもさせてはくれませんでした。私は敗北と挫折を感じながら座つて泣いていました。やっと、医者から彼を抱くことを許されました。彼の小さな身体は、暖かくて柔らかくてすぐに壊れそうでした。彼はすぐ泣きました。私は彼を抱きしめて、精一杯なだめました。どんなにか彼と代わつてやりたいと思つたことでしょう。

奇跡的に助かつた我が子は、ゆっくりと健康を回復していきました。彼は私のようにファイトのある子だとわかつたのです。そしてこの子をケイシー・ジョーと名付けました。ケイシー・ジョーが生まれて三週間経つた時、医者から、少しの間彼を家に連れて帰ることを許可されました。彼の容体がこれ以上悪化しなければ、腎臓の障害の治療のために大手術を受けることになっていました。

私は夜息子を見守りながら、寝ないでいたものでした。彼の小さな身体は依然として包帯やモニター装置やチューブや傷跡でいっぱいでした。彼はまるで一呼吸一呼吸闘っているようにみえました。私が眠っている間に彼が眠つたまま死んでしまいうで、私は恐くて眠れなかつたのです。

何度も何度も、「なぜ私の子どもが苦しまなくてはならないのですか。」と私は尋ねました。それはとても不公平なことに思えたのです。「神様、なぜ幼いケイシー・ジョーがこんな酷い目に遇うのですか。私にあの子の代わりをさせてください。」と私はお願いしました。

そうして、とうとう手術を受けるために、彼が市の大きな病院へ連れ戻される日がやって来ました。我が子が五時間手術台の上に寝かされている間、私は悲しみにくれています。

手術が終わつて彼が自分のベッドに戻された時、彼は身動き一つしませんでした。彼の小さい、ひ弱な身体を見ながら、神様に彼の命をお助けくださいとお祈りしていると、私はたまらなくなり、心臓は張り裂けそうでした。

ケイシー・ジョーがようやく目を覚ました時、彼はとても苦しうでした。泣き叫び、むずがって、転げ回ろうとしました。痛みを鎮めるためにモルヒネが再び投与されましたが、それでも苦しうでした。私はまた彼と代わつてやりたいという思いで一杯でした。

私の両親と一緒に居てくれ、支えてくれたおかげで、私はずいぶん救われました。両親の表情や口調から、同じようにつらい思いをしていることが分かり、悲しみを背負っているのが自分ひとりではないことを知つたのです。ケイシー・ジョーがその手術に持ち応えられそうだとわかると、その喜びを皆で分かち合つたのです。

一週間後、医者がまた手術のために彼を連れ戻しに来て、今度は右側の腎臓にこの前と同じ手術をしました。今回彼は七時間手術台の上に横たわっていました。

私には、あとのくらい彼がこのような事に耐えられるのか、あ

とどのくらい私が耐えられるのかわかりませんでした。いったいこの苦しみに終わりは来るのだろうか。しかし、十日後、やっと彼を家に連れて帰ることができたのです。

その日は私にとって人生最良の日でした。やっと私の奇跡の赤ちゃんと家で一緒に過ごせるようになったこと以外ほかのことは何もかもどうでもいように思えました。

この重い病気を患った赤ん坊を持ったことは私を人間的に成長させました。私が自分の人生をすべて思い通りにできるなんてもう思っていない。私には家族や友人や教会や従業員や、それに、もちろん神への強い信仰が必要なのです。

私の考え方は一晩で変わったのでありません。大勢の人の助けによって、晴れた日の心地よい日差しのような、以前は私が当たり前だと思っていたごく普通のものに、私は気づき始めたのです。そして、あの重要な教訓を学んだのです。「困ったときにはお互いが必要である」と。

あれから一年以上が経ちました。今では私の奇跡の子どもは歩いたりしゃべったりして元気にしています。そして私は、私のちっちゃな奇跡の子であるケイシー・ジョーが元気に生きていることに本当に心から感謝しているのです。

パメラ・クラーク

母と娘のチーム（胎児の代弁）

クリスチャンではなく、17才だったティナ・ハフマンは七年生の頃から性的な方面では活発だった。そして、ついに妊娠してしまった。周囲の人のすすめもあって、中絶手術を受けに行った。おかしなことに、中絶した後もずっとつわりのような体調が続いていた。ティナは言う。「体調が少しもよくならないのは、避妊薬ピルと中絶のせいだと思っていた。でも二ヶ月過ぎた頃には何かおかしいと気づいて婦人科医に行ったの。」そこでティナは、自分が変わらなず妊娠していることを知らされる。中絶は失敗だったのだ。これが18年前のことである。今では、ティナと彼女の17才になる娘のハイディは、プロ・ライフ活動の熱心な支持者である。この母と娘のチームは、自分達のプロ・ライフ活動とイエス・キリストへの献身について各地で話している。

「ハイディはどうしてこの活動に参加するようになったの？」
「私が七つの時、母が私をプロ・ライフの討論会に連れて行って、私のことを話して泣いたの。私が母に何故泣くのと聞いたら、母は私を中絶しようとしたことを話してくれた。その時は、意味がよくわからなかったけど、後になって母は私を産みたくないと思ったと気づき悩んだわ。」

「中絶をむりやりやめさせるなんてことできない。ただ、中絶した後どうなるかってこと話してあげるだけ。」
「お母さんがあなたにしようとしたこと、許してあげられる」
ハイディは笑いながら言った。
「神様は私が犯した罪をすべて許してくださるんだもの。私だって母のこと許してあげなきゃ。」
ティナは中絶手術を受けに行つた日のことを思い出してこう言う。
「まるで流れ作業のようだった。今でも同じね。法律で許されているからって、安全とは限らないの。その合法手術のおかげで、感染症や病気になることだってあるし、死ぬことすらあるの」

ティナが地区の保健所に行つて妊娠を知らされた時、保健所は中絶医のリストをくれたと言う。
「みんな、選択の余地なんかないかのような態度だった。その当時、町に妊娠救済センターなんかなかったし。母も、ボーイフレンドも、友達もみんな中絶をすすめたわ。おまけにその友達ほとんどが既に中絶経験者だったしね。」
プロ・ライフ活動は、神経を使う仕事で、「休み」が大事だとティナは言う。

「ときには、もうこれ以上続けられないと思うこともあるわ。でも、家に帰ってみんなと過ごす時、気分が一新されて、また活動に出かけられるようになるの。人間誰でも休みつて必要なのね。」
ティナがサウス・カロライナ出身のローライナと結婚してもう13年になる。二人の間には、五歳のステファニーと四歳のジェイコブも産まれた。
「本当に神様のお恵みとしかいいようがないわ。だって、ハイディの後にも、もう二回中絶してるんですけど。とても後悔している。忘れられないわ。たと

え神様がお許しくださっても。」涙をこらえながらティナは言った。
ティナは、自分が信じるものについて自分が関わっていききたいタイプの人間で、しかも、たった一人の人間がものごとを変えようということを経験から知っている。
ティナは、プロ・ライフ活動は彼女にとって戦いみたいなものという。
「プロ・ライフに関わるまで、十字架にかかかれているものがないという意味なのかすら知らないようなものだった。」とほほえみながら、ティナは言う。
「この国のハートをやわらげるのは大変ね。悪がはびこりすぎてるのよ。」



彼女は、今アメリカで絶え間ないプロ・ライフの活動が世間を変えつつあると言う。ティナとハイディは、ショッキングなニュースが人々の関心をひくようになってきたと言う。
「飛行機事故とか、母親が子どもを殺したとか、子ども同志で殺しあったりとか、そういう残虐な事件にみんな無関心でいられなくなってきたらいい。」
このパワフルな母と娘のチームは、これからも各地をまわって、胎児の代弁者として活動しつづけるという。彼女達は奇跡はおこり得るし、ものごとが変わると信じている。

キャロル・カヒマイヤー

母性愛

まだ昨年のことのように覚えていません。一九九一年九月十日のことでした。私はクリステンを医者に連れていきました。娘は以前から生理不順だったので、その時は五、六ヶ月も遅れていたでしょうか。私は自分が十六の頃から生理不順だったこともあって、娘は単にこの私の体質を受け継いでいるのだと思いい、たいして心配はしていませんでした。四人の子どもと大勢の孫達の面倒を見てきた私の母は、クリステンが妊娠しているのではないかと行ってました。お母さんたら、これは単におきまりの検査で、自分が昔、私を連れて行った時と同じだって事、分からないのかしら。クリステンは生理が順調に来るようにホルモン注射の一つでも打つてもらえばいいだろう。

医者に着いたら、例のごとく新患に対する山のような書類が記入待ち状態で膝の上にとさどさと積み上げられました。女性の医師の方がクリステンも意識せず、リラククス出来るだろうと思いい、そこを選んだのでした。わずか十六歳で娘には当然初めての骨盤検査でしたので、なる

べく緊張させないよう出来る限りのことをしてやろうと思っただけです。

全書類をやつとの事で書き終ると、看護婦がクリステンを診察室に呼び入れました。プライバシーを尊重した方がクリステンの気持ちのためにいいだろうと思いい、クリステンには外で待つているからと伝えました。

きれいな花模様様の壁紙の貼つてある待合室で待つていると、先ほどの看護婦が、医者が話があると伝えてきました。クリステンは未成年なので保護者の私に治療についての説明があるのだわと私は思いました。

診察室のドアを入ると、クリステンは泣いていました。検査がショックだったんだわと思いいましたが、まさか泣くほどとは思像していませんでした。クリステンに笑いかけると、医師に向かい合いました。彼女は微笑んで、「ジリランドさん、娘さんは妊娠しているようですね。」一瞬、私は石にでもなつたかのよう

に身動きできず、頭の中は真っ白。思考は完全に停止してしましました。次に、頭の中にさっきの言葉が鳴り響きました。

「クリステンが妊娠...」「クリステンが妊娠...」私は頭を振つて、その言葉を振り落とそうとしました。医師のその言葉が繰り返し繰り返し頭の中をめぐるのを打ち消そうとしたのです。

それから、私はクリステンの方向き直りました。この時点で娘はしゃくりあげるほど激しく泣いていましたので、大丈夫かと声をかけました。その表情を見ると胸がよじられる思いでした。クリステンは一言しか言うことが出来ないようでした。しかも繰り返し、繰り返し言うのです。



嫌いにならないで、嫌いにならないで...嫌いになる?どうやったら嫌いになれるというの?私の娘なのよ、あなたは。私は娘を抱きしめ、胸で泣かせるままにしていると不思議と何の怒りも痛みも覚えませんでした。私は神が与えて下さった私の人生の恵みであるかわい愛しい子どもに強い愛しか感じませんでしたが、神がせつかく与えて下さったこの子を私はしっかり注意を払つて、保護し、良き人物となるよう育てなければならなかつたのに...私は神のこ

期待に比べられなかつたのです。その娘が今十六歳、高校三年生にして妊娠中とは。

私は医師に向き直り、クリステンは妊娠どれくらいなのか尋ねました。診察ベッドの端で娘のそばに立つてみると、なんと、医師がクリ

ステンに超音波検査をし始めました。画面の像のピントが合い、鮮明になり始めた瞬間に涙がこぼれ始めました。小さなスクリーンに映し出される小さな身体の外目を目にした瞬間泣いてしまつたのです。頭も腕も胴体も脚もみんな見えるではありませんか。小さな指の動きまで見えます。この経験は全く驚きで感動的でしたが、最も心打たれたのは、私の孫の小さな体内に血液を送つていて、強く小さなその心臓を見て、その鼓動を聞いた時でした。私の孫。怒りも悲しみも後悔もまるで感じませんでしたが、そのような感情が襲つてくる前に、医師が超音波で私の孫を紹介してくれたのです。

の父親の反応は予想できませんでした。怒り狂うでしょう。母の注意に耳を傾けようとしなかつた私にそれ見たことかと言わんばかりの母、そして、きつととまどつて何で?どうして?と繰り返し聞くであろうクリステンの小さな弟。でも、まあ、後で何とかなるでしょう。だって今は、これまで感じたことのないほど強い愛情しか感じられないのですもの。そう思いつつ、私はクリステンの顔をスクリーンに向けさせると、私の孫に紹介しました。

二月二十二日、午前四時四十分、私の孫娘がこの世にお目見えしました。あの日の診察室以来、私達の生活は一変し、私はこの変化を毎日神に感謝しています。孫娘は私達の日々を愛と喜びで満ちあふれたものにしてくれます。今や彼女なしの生活は考えられません。

クリステンが登校を中止せざるを得なくなつたのは三年生の時でした。おなかが目立つてきたのでやむを得ませんでした。出産後、彼女は再び学校に戻り、卒業しました。

孫娘にとつて初めてのクリスマス・イブは彼女の母親と父親の結婚の日でもありました。父親のマークは大学で今医学を勉強中で、クリステンも又大学に通い始め、特殊教育を学んでいます。

「大人への階段」での葛藤

大学二年、19歳の頃は純真で危なっかしかったと自分でも思う。とにかく大人になりたくて仕方なかった。当時、つきあつて数ヶ月になるボーイフレンドに夢中だった私は、11月のある日、彼の車の中で軽くビールを飲んだ後、彼の部屋へ行った。

セックスにはかなり以前から興味を持っていたが、両親から結婚まで待つように言われていた。自分はクリスチャンではないけれど、神が怖くて従つてきた。しかしこの数週間、彼に抱かれないと思いを、もうこらえきれなくなつてきた。このような考えは罪の道を歩む可能性になる、という聖書の言葉におびえながら、それまでは結婚まで待つつもりでいたのに。その先はまるでボルノ映画のように、あつけない、人間性を無視した、泣きたくなるような時間が過ぎていった。こんなものだったのか。そうして私は身体を許し、処女を捧げた。

帰り道からもう、純粹で控えめな少女ではなくなつてしまった。今や、開放的で明けつ広げなぬけがらとなつたのだ。必死に守ってきたすべてをなくした自分の罪と浅はかさを責めた。最悪なのは、一度身体を許すと、次からはいつも簡単にセックスしてしまうことだ。例に漏れず、私達も、らせん階段をかけ降りるようにお互いの部屋での愛欲行為にズルズルおぼれていった。私はもう大人よ、避妊だつてしているし、自分の行為に責任が持てる成熟した女性：そう思つてきた。だが、性欲には歯止めがきかず、大学の課題、アルバイト、友人そつちのけで二人だけの世界にいた。そんなある日、セックスについて話し合っているうち、神が私達の

性生活の中に入り込んで来た。

初めてのデートから八ヶ月たった頃、私は洗礼を受けることにした。自分の身体が「神の偉大な創造物を宿す神殿」で、また「夫となる男性だけに捧げる大切な物でいなくてはならない」と教えられた。ジョシユ・マクドウェイル氏の本「なぜ待つのか？」を読んで洗礼の決心をした。それから自分の身体を他の目的に使うとすると、神の声が聞こえ涙が出てきてしまふ。神は私を浄化し、許して下さい。

ボーイフレンドはと言えば、私がセックスを拒むと怒つた。彼のことをまだ愛していた私は、ひたすら強く祈り続けながら、毎晩枕を濡らした。数日が、数週間が、過ぎてても状況は変わらない。私は待つことに賭けた。1年余り過ぎた頃、ついに彼も洗礼を受けることになつた。今、私達は結婚し娘も一人いる。神の力を借りれば不可能などないのだ！

今回のいきさつを通じて、神は、意志の力だけでは不十分なこともあると教えてくださったのだと信じている。神との信頼関係が、他のどんな結びつきよりも強固なのだと思う。また、私のみならず、すべての人間にとって性欲は、自分自身の手を負えない強い欲望だということも教えてもらった。神の意志の前に自分のすべてを任せられた時、新たな美しい世界が開けるだろう。

十代の人達は、お互い励ましあつてその日を待とう。父母は、処女である素晴らしさを子ども達に教えてあげよう。神があなたにふさわしい結婚相手と巡り会わせてくれるから、それまで待つように伝えよう。神もそんなあなたの決意を喜んでくれることだろう。

ジャックリン・V・キルヒナー

事務所便り

わか草もえる 丘の道
心もはずむ 身もはずむ
小鳥のうたに さそわれて
わたしもいつか うたいだす
小川の水も さらさら
やさしい音を たてている
おもしるそうに こやぎまで
わたしのうたを 聞いている

事務所の方ではいくつかの新しいパンフレットを準備しました。まず最初はピルの説明のパンフレットです。三月に政府はこの避妊薬ピルを解禁しようとしています。でも、私達一般の国民はなかなかその作用や安全性について詳しく理解していかないのが実情です。特に、避妊薬としてのみ聞かされ、性交渉の後、又は妊娠しているのを知らずにピルを服用すれば、早期中絶の作用もあることをメディアでは取り上げずに隠しています。

高知新聞(99・1・1)に「人口爆発防止」
十代の避妊、社会が手助けという題で掲載されていたメキシコの話ですが、世界的に十代の妊娠が増えている今、発展途上国の人口問題解決の支援をしている日本の家族計画国際協力財団が作ったアニメ映画「青いハト」の上映のあとの授業の一コマ。ティーンエイジャーへの性教育授業で、コンドームの必要な時はお兄さんにもらうと男子生徒、ピルが必要なときはお母さんに言つて、家族計画連盟でもらうと女子生徒が述べていました。これが、社会が出来る十代への本当の手助けでしょうか。日本もいつかこのような社会になつて行くのではないかと不安です。私達は本当に安全なものを求めるために、正しい情報を得て、正しい選択をしたいものです。

日本プロ・ライフ・ムーブメント